

## ■ 柏谷メソッド 令和3年度司法試験合格者インタビュー

[インタビュアー]

本日の合格者インタビューは、平成30年度の予備試験に合格、令和3年度の司法試験に合格されたAさんです。Aさん、自己紹介をお願いいたします。

[Aさん]

はい。Aと申します。昨年度ですね、社会人をさせていただきながら、柏谷先生の講座で予備試験や司法試験に合格させていただいて、今回こういうお話をいただいたので、何かしらのお話をさせていただければなと思ひまして。よろしくお願ひします。

[インタビュアー]

よろしくお願ひいたします。では早速ですが、司法試験を目指されたきっかけについて教えていただけますか。

[Aさん]

私が予備試験を受けようと思ったきっかけは、大学生活が結構暇で、時間も多いい中、大学で学んで就く仕事が専門職だったものですから、今後の自分の仕事に何かプラスアルファが欲しいなあっていうところがありまして。その専門職の勉強のすごく深掘りを学生時代にするっていうのはちょっと違うかなあと思ひていたんで、法律を勉強させていただこうかなあと思ひて勉強を始めたのがきっかけです。

[インタビュアー]

ありがとうございます。専門職以外に、今後自分にとって何かプラスになるようなものと思ひて司法試験を目指されたということですね。

[Aさん]

そうです。

[インタビュアー]

では、その中で柏谷先生の講座を受講しようと思われた理由は何だったのでしょうか？

[Aさん]

そうですね、いろいろな予備校本とかが売っているとは思ひんですけども、メディアリテラシーじゃないですけど、どの先生を信じるのかっていうのは結構、受験において大切なかなあと思ひていまして。大学受験であれば学習指導要領からしか出ないんですが、司法試験って、学者の本だっていっぱいあるし、何を信じようかなあっていうところがありまして。そこで、**柏谷先生の「司法試験っていうのは実務家登用試験である」**っていうところが**すごく勉強の方向性としてすごくわかりやすかった**んですね。柏谷先生の過去問解説や問題文の読み方、知識の整理の仕方も結局、法曹実務家登用試験であるっていう観点から説明されていて。法曹実務家登用試験ってどういうことかっていうと、私の解釈ですけども、学者に

なるわけでもなく、あくまで法曹三者になるための、法曹三者みんなと同じことができる人を探す試験だっていうニュアンスでおっしゃられたような気がして。それはすごく自分の中でしっくりきて、その上で勉強するってのはすごく合理的なんじゃないのかなと思って、柏谷先生の講座を取らせていただいたっていうような形になります。

[インタビューアー]

他にも様々な予備校やスクールなどがありますが、実際に受講してみて、他の教材などと大きく違うなど思った点について他に何かあれば教えていただけますか。

[Aさん]

そうですね、大きく違うのは、問題文の分析ですね。この問題文をこういうふうを読むという。たとえば、段落にも意味があって、出題者が書きたいことが散りばめられているという分析です。柏谷先生の解説は「そうだろうな」「そういう見方が本当に正しいんだろうな」というような感じで、問題文の読み方の解説をしてくれる、パラグラフリーディングだと僕は思ってるんですけども、そこが他の講師と違うかなと思います。

[インタビューアー]

読み方の解説に納得感があるっていうところですね。

[Aさん]

そういったところだと思います。

[インタビューアー]

法的思考力を養うためのインプット講座はいかがでしたか。

[Aさん]

そうですね、インプット講座はすごく言い方が難しいんですが、多分巷のまとめ本みたいなのに比べるとすごくスリムだとは思うんですよ。スリム、かつ、短答も論文も対応できるようにっていうようなところで作成されてるんじゃないかなと思考するんですけども。短答知識だけでなく学説対立とかも入れながら、近年の司法試験だと学説対立みたいなのも聞かれるとは思うので、そういったのを意識されながら、ミニマムに、かつ、いろいろなところに臨機応変に対応できるようにっていう形で、インプット講座の教材などが作られてるんじゃないのかなあっていうのをすごく感じました。

[インタビューアー]

ミニマムかつ必要なことは全て網羅されているという印象でしょうか？

[Aさん]

そうですね。そういった形かなと思います。

[インタビューアー]

アウトプット講座を受けていて、手応えはいかがでしたか。

[Aさん]

最初は「そんなのできないな」って感じでずっと受講させていただいたんですけど、**だんだん**聞いてるうちに、**なんとなく問題文の読み方が自分の中でも確立されていった**っていうところはあったので、すごくそれに関しては手応えっていうのはあったと思います。

[インタビュアー]

受験期間中どのように学習を進めていったのか教えていただけますか。

[Aさん]

社会人なんですけど、諸事情がありまして、予備試験受かってから2年間、司法試験を受験できなくて。直前も詰め込めなかったんで、合格できたのはちょっと運の要素もあったかなあと思います。でもそれは多分柏谷先生も授業で言われていたことだったんですけど、なんか「**勉強すればするほど落ちる試験**」っていうようなニュアンスで、柏谷先生は言われてて。それは多分あながち間違っていないんで。先ほどの法曹実務家登用試験っていう観点からすると、「それ聞いてないよ」とか「そこまでは書くなよ」って、やっぱりコミュニケーションと一緒に思うので、受験回数が増えてくれば増えていくほどいらんこと勉強しちゃうっていうところあるんで。一方で勉強しないわけにもいかないっていうそのバランスは、社会人やりながらっていうところで、いい感じのバランスに幸いになったかなっていうのは印象です。

[インタビュアー]

ありがとうございます。今おっしゃいましたように社会人をしながら司法試験の勉強をするというのはとても大変なことだと思うんですけども、両立のために何かこう、工夫したようなことはありますか。

[Aさん]

仕事をしている時間って、ある意味勉強しすぎない時間っていうところで、うまくバランスを取るっていうことかなあと思います。それなりに忙しいほうの仕事ではあったんですけど、自分の時間もあったので、そのバランスだと思うので、他の社会人の方にも言うのであれば、自分のその仕事の忙しさを踏まえて、仕事があるから本当に大事なことだけ勉強するっていうような工夫が大事なかなと思います。大事なことメインで勉強していくっていうようなことが工夫なのかなと思います。

[インタビュアー]

大事な事だけを選別するというのがまた難しいところなのかなと思うんですけども、そのあたり柏谷メソッドだと、そこを選ばずとも既に用意されているというような感じでしょうか？

[Aさん]

そうですね。そういった感じです。

[インタビュアー]

Aさんの場合、お仕事がある日はあまり勉強せず、お休みの日にするというスタイルでしたか？

[Aさん]

はい、そのスタイルだったかなとは思うのと、あとはレジュメがPDFで配られるので、例えば時間が空いているときとかにPDFを見るっていう分にはすごくいいと思うので、合間と、休日とってという形ですかね。平日の仕事終わりに勉強しているってことはなかったかもしれないです。

[インタビュアー]

仕事の合間時間にPDFでさらっと見れるのは、スキマ時間が活用できて、いい勉強法ですね。

[Aさん]

そうだったと思います。

[インタビュアー]

先ほど、「コミュニケーションだ」というようなお話もありましたが、特にアウトプット講座に関しては、採点委員とコミュニケーションしながらっていう意識がすごく大事になってくるんですか。

[Aさん]

コミュニケーションというところちょっと標語的にはなってしまうんですけども、論文書く時に、勉強すればするほど「こっだけ僕勉強したんだ」みたいになっちゃう人が多いと思うんですよ。ましてこの試験を受けそうな人のキャラクターを考えると。そうじゃなくて、やっぱり相手が望んでることを答えるってことが大事で。弁護士になってからも、事件を受任するってなったときに、法律論ばかり言っているだけではなくて、相手のニーズにもある程度応えないと、コミュニケーションが成り立たないんじゃないのかなとは思っています。そういう意味でやっぱり向こうが聞きたいことを答えるっていう。採点官とか作問者と受験生って圧倒的な上下関係があるんですけど、その上下関係の中で向こうが聞いていることに答えるっていうのはやっぱり、コミュニケーション的な要素もあるのかなとは個人的には思っています。

[インタビュアー]

ありがとうございます。ちなみに、柏谷メソッドの受講前に司法試験の勉強に関して、Aさんが課題だなと感じていたことなどはありますか。

[Aさん]

そうですね、それはやっぱり巷で司法試験の参考書とか売ってると思うんですけど、多分その論証パターンを切り貼りして貼り付けても多分受からないなっていうのはあります。それは多分、巷で売ってる参考書の論証の網羅性の低さっていうのもあるんですけど、それだけじゃないところもすごく感じていて。それは誰かにやっぱり教えを請わないと論文対策って

というのはちょっと厳しいなっていうのを感じてたところで、誰に教を請うかっていうところが多分個人的な課題だったんですけど。誰を信じるかとかってことですね。その上で、ちょうど自分の課題と柏谷先生のあれですね、論文の勉強の仕方の方向性っていうところが課題としてあったのをちょっとマッチしたので。自分の課題としてはそうですね、どういう方向性で、どういう情報が大事なのかっていうのを知って、そのノウハウを教えていただくってところが自分の中では課題でしたね。

[インタビュアー]

実際に柏谷先生の講座を受講してみて、ぴったりだなんていうふうにお感じになりましたか。

[Aさん]

そうですね、それは先ほどもちょっと触れさせてはいただいたんですけど、ぴったりだったなと思っております。

[インタビュアー]

ありがとうございます。講座を受講する中で、過去問を解いたりするようなこともあったかなと思うんですけども、その際に、手応えというか、いけそうだなって思うような瞬間ってありましたか。

[Aさん]

そうですね、先ほど申し上げたパラグラフリーディングっていうようなニュアンスですが、憲法が一番近いんだと思うんですけど、この情報ここに入れるみたいな感じで、ポンポンと入れちゃえば多分答案として成り立ってしまう要素が強いと思うんですけど。その憲法の問題文を読んだ瞬間にもう何も考えずに書けるんですよ、憲法だったら。そういう反射とか条件反射みたいのがすごくだんだん速くなっていったなっていうのを感じたところがあって、それはすごく手応えを感じましたね一番、はい。

[インタビュアー]

学修される中で、つらいなとか本当に合格できるかなと不安になったりするようなことはありましたか。

[Aさん]

そうですね、それはやっぱり合格するまでは思っていて。柏谷先生の話聞いて思ったのが、**みんなと同じ答案を書くっていうのがすごく大事**だなんて思っていて。自分も大学受験とかの英作文の答案を採点しているんですけど、やっぱ自分も思うんですけど、英語を勉強したての受験生って、関係代名詞が入り混じっているすごく難解な文章を書くんですけど、そういうのって受験の英作文ではあまり求められてなくて。ちょっとわかりやすく書いて、関係接続詞とかですごく文の流れがわかりやすく書くのが、英作文の肝なんですけど、この自分の経験と、柏谷先生が言っていることがすごくしっくりきたんですね、**採点者の気持ちになって考えると**。ただ、それってその周りと同じことを書くっていうことなので、「本当に周りと同じことを書いて受かるのか」っていうのは、やっぱりちょっと、難しいというか、合格者と不合格者がいる中で、「みんなってなんだよ」っていうのがやっぱりあるんですよ。

そこが難しいというか多分受験してる中では絶対に消えない、受かってしまったらいくらでもそんなこと後出しで言えるんですけど。「みんなと同じ答案書け」って。そこがやっぱり受かってみないとわかんない、それも正直運だなんて。最後の最後は運だなんていうところがあって。みんなと同じ答案を書きつつ、合格者の中に入るっていうその不確実性っていうのは受験の最後までとけなかったなって個人的には思っています。

[インタビュアー]

実際に合格されてみてそのときにやっていたことは正しかったなっていう感じですか。

[Aさん]

個人的には社会人やりながらだったら申し分ない成績だったんですけど、「受かってよかったな」ってのが正直な感想です。個人的な意見なんですけど、いろんな合格者の方がですね、すごく受かってみんな喜んでるから、自分の努力とか、こう言うんですけど、やっぱりメディアリテラシーじゃないですけど、受かったから言えることなんで、いろんな合格者の話は、その話半分に聞いていただけるといいかなって。本当、受かってよかったなっていうただそれだけです。

[インタビュアー]

先ほど、社会人としては申し分ない成績で合格することができたという話がありましたが、ちなみに差し支えなければ、順位などどれぐらいの成績で合格されたのか教えていただけますか。

[Aさん]

あんまり覚えてないんですけど、700位か900位、どっちか、900位だったかな、そのくらいだったと思います。正直、他の人は、僕も人生かけてるつもりでしたけど、本当に人生かけてる中では、そのあたり取れたのがすごく十分だったかなとは思っています。

[インタビュアー]

はい。社会人をされながら、それぐらいの成績で合格できるのはとても心強い事例だと思います。

[Aさん]

ありがとうございます。

[インタビュアー]

法曹実務家登用試験ですとか、勉強すればするほど落ちる試験など、印象的な教えがいくつか出てきましたが、他に何か、柏谷先生の教えの中で印象的だった教えやアドバイス、言葉などは何かありますか。

[Aさん]

しいて挙げるならやっぱりあの時間配分とかそういうテクニク的なところかなと思いますね。多分そういう完璧主義の人って何というか、全てのことをちゃんと答えようと思っちゃ

うと思うんですけど、その手の抜き方とか、そういったところですね。特に、どんな受験生でも書けないような問題とかに関しては、問題文から読み取って、何かそれっぽいようなことを書くだけで差がつくみたいなことは言われていて。そういったことは、すごく印象に残っているかなと思います。

[インタビュアー]

知識を披露する場というより、司法試験に受かるためのテクニック、時間配分などもしっかり教えがあったっていうのが心強かったっていうお話ですよ。

[Aさん]

そうですね。

[インタビュアー]

では、柏谷メソッドの講座はどのような人に向いていると思いますか。

[Aさん]

自分の勉強の方向性を悩んでらっしゃる方っていうのはすごくいいのかなあとは思っていて。私は、予備の短答は、予備校さん通わなくても何とか通すことはできたんですよ、ただ論文ってなっちゃうと正直、何を信じればいいのか難しくて。予備校の解答速報を見ても何が大事なのか、まったくもって自分の読解力じゃ読み取れなかったんですよ。勉強の方向性ってやっぱり大事ななっていうのをすごく実感しました。巷の合格者体験記って「勉強して努力したら受かっちゃった」みたいな、多分たまたまうまくいった人が喋ったりとかすることもあると思うんで。特に若い受験生とかだと。そういう人ってやっぱり、なんですかね、若ければ若いほどそうなんですけどね、すごく何だろうな、その自分が努力したところとかをすごくきらきらと喋っちゃうところがあると思うんですけど、それがたまたまその人の勉強と出題がたまたまマッチした結果だと僕は思っていて。そうじゃなくて、自分の勉強の方向性を悩んでいる人にはすごくいいのかなと個人的には思っています。

[インタビュアー]

たまたまではなく、確実に合格に繋がられるようなものを提供しているのが、柏谷メソッドと言ってもよろしいでしょうか？

[Aさん]

そうですね、そうかと思います。はい。

[インタビュアー]

Aさんは、今の予備試験や司法試験に合格するために必要な能力ってどのようなものだとお考えですか。

[Aさん]

そうですね、僕はやっぱり先ほど申し上げた二つだと思います。①問題文を読んで相手が聞きたいことを考える能力と、②英作文みたいな短くまとめるっていう能力ですね。問題文を

読んでも、ぱっと見は何を聞いているかやっぱりわからなかったりするんですよ、知識があったとしても。問題を読んだときだと「そんなの思いつかないよ」ってところがあって。それは僕どちらかというと数学に近いと思うんですね。数学も、答え見れば「いやそんなのを勉強したけど、なんでそんな思いつくんだよ」みたいなのところから、**問題文を読んで、教科書に書いてあるところを逆算する能力**っていうのが多分数学に近くて、**問題文を読んで、あれを聞いているんだなって読み取る力**と、あとはそうですね、**いらんことを書かない、短く書く、向こうに読みやすい文章で書く**ってのはすごく英作文に似てるなって思っています。その二つが司法試験の合格っていう意味では一番大事なのかなと思います。それが司法試験の合格に一番大事なのかなと個人的に思っております。

[インタビュアー]

ありがとうございます。今後Aさんは、法曹資格をどのように活かしていくおつもりですか。

[インタビュアー]

そうですね、自分がやりたいような事件とかをやりながら、うまく自分の専門職もやりながら、そういう人生をやっていききたいなと個人的には思っております。

[インタビュアー]

今その二つをうまくいい落としどころを見つけるべく、模索しているという感じですね。

[Aさん]

そうですね。はい。

[インタビュアー]

それでは最後に、動画をご覧の皆さんや、これから受講を考えている方に向けて、何かアドバイスやメッセージがあればお願いいたします。

[Aさん]

そうですね。もしこういう機会があったらこれだけは言おうと思ってたことが、やっぱり合格者インタビューってみんな自分が言いたいことを言うんですよ。だから「僕はもう毎日」みたいな「電車中であつと本を読んだり」とかみたいな、そんな教材一元化したみたいな、そんなのは何かその人がたまたま合った単純な方法論でしかないと思っています。やっぱり僕、この試験の本質的なところって、**問題文を読み解く読解力と、文章作成能力**っていう、**その二つが論文に合格するにはすごい大事な**んだろうなと思っています。もちろん、**僕が言ってることはもしかして間違ってるかもしれないし、他の合格者が言ってることも間違ってるかもしれない**とは思いますが。だから、**メディアリテラシー**ですよ。この人の言ってることの何が正しいんだろうっていう、ような。そういうちょっと批判的な目線でいろんな合格者、もちろん予備校の講師もそうだと思うんですけど、**批判的な目線で自分の方向性**っていうのを決めていただく**のが一番、この試験で大切な**のかなと個人的には思っています。

[インタビュアー]

本日は、ありがとうございました。